

道徳部会 研究の構想（案）

令和3年度～

I 研究主題

道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める道徳科の授業はどうあればよいか。

－主として人との関わりに関すること－

II 主題設定の趣旨

現代の社会は、グローバル化や情報化の進展、少子高齢化等、社会の急激な変化がもたらす様々な影響により、将来の予測が困難な時代を迎えている。このような社会で生きて働く知識や力を育むために、「何を学ぶか」に加え、「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」といった学びの質の転換が求められている。そして、その学びの過程となる「主体的・対話的で深い学び」をどのように実現するかが課題となっている。

道徳教育においては、「特別の教科 道徳」が令和元年度より全面実施となった。他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を育むため、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の生徒が自分自身の問題として捉え、向き合う「考える道徳」「議論する道徳」へと転換を図り、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指してきた。

令和2年度までは「主として自分自身に関すること」を副題に設定し、「指導する教師が道徳的諸価値をどれだけ深く理解し、授業に臨むか」「生徒が学習課題を自分の課題として捉え、それを多面的・多角的に考えることを通して、人間としての生き方について考えるための手立ては何か」という視点を軸として、授業改善に取り組んできた。3か年の研究から、改めて教師が道徳的諸価値の理解を深めておくことが授業改善につながるということが明らかになった。そこで、次の3年間では「主として人との関わりに関すること」の内容項目に焦点を当て、研究を進めることにした。

本県の生徒の実態を全国学力・学習状況調査の生徒質問紙から見てみると、将来の夢や目標をもっている生徒の割合は、全国平均と比べて依然として低いが、これまでの道徳部会の取組の成果もあってか、平成29年度からの3年間では増加しており、自己肯定感が向上してきていることがうかがえる。このような実態を踏まえ、今後は、自己の生き方を人との関わりにおいて捉え、望ましい人間関係の構築を図るための道徳的判断力、道徳的心情、道徳的实践意欲と態度を養いたいと考え、研修の視点を「主として人との関わりに関すること」に絞ることにした。他者と対話し協働しながら、物事を広い視野から多面的・多角的に考察できるようにしていきたい。

本研究は3か年を1サイクルとして研究を進めている。同じ内容項目で分類整理し、3年間の研究を行うことで、指導する教師の道徳的諸価値の理解を深めることを意図している。そのような深い価値理解を基本として、年次ごとに重点研究内容を設定し、焦点化された研究を推進していきたい。

III 研究のねらいと内容

1 研究のねらい

主として人との関わりに関する道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方について考えを深める生徒を育てるために、実践的研究を進める。

2 研究内容

(1) 年次ごとの重点研究内容

2021年度（令和3年度）…道徳的諸価値の理解を基に、道徳的な考えを深める発問の工夫
2022年度（令和4年度）…道徳的諸価値の理解を基に、道徳的な考えを深め合う話し合いの場の工夫
2023年度（令和5年度）…評価との一体化を意識した指導

(2) 道徳科の授業を構想するための方策

(3) 道徳科の授業に生かす指導方法の工夫

道徳部会 令和4年度研究計画（案）

I 研究主題

主として人との関わりに関する道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める道徳科の授業はどうあればよいか。

－道徳的諸価値の理解を基に、道徳的な考えを深め合う話合いの場の工夫－

II 主題について

令和3年度から、内容項目の四つの視点のうちの「B主として人との関わりに関すること」を中心として、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める生徒を育てる道徳科の授業について研究を推進している。

令和3年度は「道徳的諸価値の理解を基に、道徳的な考えを深める発問の工夫」を副題に研究を進めたところ、教師が教材を的確に深く読み込むことで、価値に迫ることのできる発問や新たな視点に気付かせる問い返しを設定できることを再確認することができた。また、生徒一人一人の発言やつぶやきの肯定的な受容や、互いの考えを伝え合う活動の継続によって、道徳科の授業を楽しむ雰囲気の醸成につながることが明らかとなった。

令和4年度は、「道徳的諸価値の理解を基に、道徳的な考えを深め合う話合いの場の工夫」を副題に設定し、対話的で深まりのある授業を目指す。道徳科が目指す「話合い」とは、自分自身も含めた多様な人々と共に問い、考え、語り、聞くことであり、多様な考え方に触れ、自分の考えをさらに深める活動であると捉える。そのような話合い活動を展開することで、人間としての生き方についての考えを深める生徒を育てる授業に迫ることができると考えられる。また、このような授業を展開するためには、教師自身が道徳的諸価値について理解し、話合いの本質について考える必要がある。教師も生徒も自ら思考し、発見し、そして、他者と共有し、つながり合う楽しさを感じる授業、道徳的な考えを深め合う授業を目指し、実践的研究を推進していきたい。

III 研究内容とその視点

内容項目の四つの視点のうち「B主として人との関わりに関すること」を中心とした道徳科の授業において、どのような学習活動を行うことで、自己を人との関わりにおいて捉え、物事を広い視野から多面的・多角的に捉える考えを引き出し、道徳的価値や人間としての生き方についての考えを深める授業となるのかを実践を通して明らかにする。道徳的な深まりのある話合いへと導く授業を行うには、道徳教育及び道徳科の目標を基盤とした全体的な授業構想の在り方が大切な視点となる。また、道徳科の授業に生かす指導方法の工夫も同様に大切な視点となる。このような視点に基づき研究実践を行い、継続的な研究につなげていきたい。

1 道徳科の授業を構想するための方策

(1) 道徳科の特質を生かした学習指導の展開

- ・道徳科の目標である「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」ことを正しく理解した上で、教材を吟味し、道徳的価値を学習指導要領解説と照らし合わせたり、複数の教師で検討したりする。
- ・特定の価値観を押し付けたり、主体性をもたずに言われるままに行動するよう指導したりすることは、道徳教育が目指す方向の対極にある。生徒自身が人生の課題や目標に向き合い、いかに生きるべきかを自ら考え、人間としての生き方について理解を深めることができるよう支援する。
- ・生活体験や教材の感想を発表するだけの活動や道徳的価値の観念的・一面的な理解に終始することがないように、道徳的価値に照らして、自分の生活を振り返り、自らのよさや課題を把握できるような学習を設定する。
- ・教師が生徒と共に人間の弱さを見つめ、考え、夢や希望等を語り合うような姿勢を大切に

(2) 教材分析と発問の吟味

- ・以下の例のように教材を分析し、授業を構想する。分析した結果を図や表等に可視化しておくことで、分析結果の共有や研究成果の蓄積に役立てる。

一例 ①生徒に考えさせたい道徳的価値に関わる事項が教材にどのように含まれているかを検討する。

②中心的な発問と予想される生徒の反応を考える。

③中心的な発問以外の場面の発問と予想される生徒の反応を考える。

④本時のねらいを設定する。（教材の活用、内容項目の焦点化、育てたい道徳性の諸様相）

- ・生徒に考える必然性、切実感のある発問、自由な思考を促す発問、物事を多面的・多角的に考えさせる発問等となるよう工夫する。

(3) 考えを深め合う話合いの工夫

- ・生徒一人一人の道徳的なものの見方や考え方を深めていくために、考えを出し合う、比較するなどの目的に応じて効果的に話合いが行われるようにする。

- ・生徒の主体性を促すため、教師が適切な指導、助言を行う進行役（ファシリテーター）となり、多様な意見や考え、新たな視点を引き出し、生徒相互がしっかりと課題に向き合う話合いになるようにする。

- ・話し合う場面を設定すること、ペアや少人数グループ等での学習を導入することが目的化してしまうことがないよう、ねらいに即して、適切な指導方法を吟味する。

- ・生徒が互いの存在を認め尊重し、意見を交流し合う経験により、自尊感情や自己肯定感を高めることも念頭に置いて指導するようにする。そのためには、道徳科だけでなく、他教科でも話合いの場を設定したり、学校や学級内の人間関係や言語環境を整えたりして、一人一人の生徒が安心して意見を述べ、互いに学べるような環境づくりに努める。

2 道徳科の授業に生かす指導方法の工夫

(1) 書く活動の工夫

- ・書く活動を取り入れ、自らの考えを深めたり、整理したりする機会となるようにする。
- ・自分自身とじっくり向き合う時間の確保や学びを継続的に深めるノート等の活用に努める。

(2) 動作化や役割演技等の表現活動の工夫

- ・教材によっては、道徳的諸価値の理解や道徳的行為の難しさ、すばらしさなどについて考えを深めるために、具体的な道徳的行為の場面の追体験や、教材に登場する人物等の言動を即興的に演技して考える役割演技等の疑似体験的な表現活動を取り入れる。

- ・単に体験的行為や活動そのものを目的として行うのではなく、生徒が体験を通じて学んだことを振り返り、その意義について考えることを大切にする。

(3) 板書を生かす工夫

- ・生徒の考え方、感じ方の違いや多様さを対比的、構造的に示す工夫、中心部分を浮き立たせる工夫をする。

- ・生徒の考えを取り入れ、共につくっていくような創造的な板書になるようにする。

(4) ICTの活用

- ・学習のねらいや目的を明確にし、道徳性を養うための手段の一つとしてICTの活用を工夫する。その際、ICTの活用が授業の目的とならないように留意する。

- ・一例 ①導入…実態や問題の提示

②展開…教材の提示、自分の考えをもつ、他者の考えを知る、話し合う、自己を見つめる

③終末…生活の様子への提示、外部の方の言葉の提示

④評価…学びの蓄積（デジタルポートフォリオ）

Ⅳ 研 究 方 法

- 1 研究主題を主体的に受け止め、各学校で日々の実践活動を通して主題の解明に努める。
- 2 各学校での実践資料や成果等を持ち寄り、各郡市、地区ごとに研究を深める。
- 3 各郡市、地区ごとに研究の視点を明確にし、研究授業、研究協議を通して、指導法の実践的研究を進め、主題の解明に生かす。
- 4 各郡市、地区ごとの研究結果を踏まえ、情報を交換し、次年度以降の研究に生かす。

